

本願寺の伽藍配置について

——両堂の配置を中心として——

岡村喜史

(龍谷大学)

はじめに

現在、真宗各派の本山における伽藍のなかでその中心をなすものは、本尊阿弥陀如来を安置する阿弥陀堂と親鸞の真影を安置する御影堂のいわゆる両堂であり、これが真宗各派本山の伽藍のなかで最も重要な位置にあることは言うまでもない。各派本山の両堂は、すべて並列し、その間を渡り廊でつながれている。この各派本山の両堂の配置を見てみると、向って右側に阿弥陀堂が、向って左側に御影堂が建つ配置となる本山は、西本願寺・興正寺・錦織寺の三本山であり、それ以外の七本山の両堂はこの逆の配置となっている。

その内現在の西本願寺における両堂は東面しており、その配置は、向かって右側(北側)に阿弥陀堂が、向かって左側(南側)に御影堂が建つという形態を取っている。ところが、この現在の西本願寺の両堂は、元和三年(一六一七)十二月二十日の火災によって焼失したのちの再建であり、天正十九年(一五九一)に天満より京都堀川へ移転してきたときの両堂配置は現在のものと逆であったようである。

そこで、元来は親鸞の廟堂より興った本願寺について、いかにして覚如が親鸞の真影を傍らに移し阿弥陀如来像を安置して寺院化していったのか、さらにその後いかにして両堂を整えていったのかについて、親鸞在世中の親鸞の御影や、阿弥陀如来像を安置したときの覚如の行動を規定すると考えられる覚如の著述などをもとに大谷時代の本願寺の両堂成立時期について、また、そのうち本願寺が大谷・山科・石山・天満・京都と移転していくなかでの両堂配置の推移を見ていきたい。

一 元和火災以前の両堂

天正十九年（一五九一）に、本願寺は大坂天満より現在の京都堀川の地に移った。しかしその後、元和三年十二月二十日の火災によって一部の建物を残してほとんどの伽藍が焼失した。その時の火災によって焼失した両堂の配置は「法流故実条々秘録」によると

一天満ヨリ天正十九年卯八月五日当地六条へ御移住以来、御堂・御対面所等次第ニ華麗被成申候。元和三年丁十二月廿日ノ炎上マテハ、阿弥陀堂ハ南ニアリテ、屋祢ハコケラ葺也。御影堂ハ北ニアリ瓦葺也。御影堂ノ北ニ茶所アリ。（中略）鐘楼ハ南ニ有リ、御対面所ハ今之所也。（下略）

とあり、元和三年の火災によって焼失した両堂は、北（向かって右）に御影堂が、南（向かって左）に阿弥陀堂が建っていたことがわかる。

それでは、天正十九年京都に移転する以前の本願寺における両堂配置はどのようなものであろうか。

本願寺は、親鸞の没後京都東山大谷に建立された親鸞の廟堂より興った。このため本来は親鸞の木像を安置するのみの六角の御堂であった。ところが、覚如の時廟堂に阿弥陀如来を安置し、親鸞の木像を傍らに遷し寺院化しようと

いう動きがなされた。その後さらに永享年間（一四三八年頃）の存如の時に阿弥陀堂を創建し兩堂の形式を整えることとなった。^③この存如が阿弥陀堂を創建した時の兩堂の配置がどのようなものであったのか史料上でははっきりとは確認できない。しかし、大谷本願寺の兩堂の位置について堅田修氏は、「東山大谷本願寺の北側に廟堂があった伝統に従」い「阿弥陀堂が御影堂の南にあった」と指摘している。^④

これは、永仁四年（一二九六）に大谷廟堂の南地を買得しており、大谷廟堂が南に延びる可能性を示唆することである。つまり、親鸞の遺骨を埋める廟堂を動かすことは考えられないであろうから、それから考えて阿弥陀堂を建立するとしたら、すでに入手されている南に建てることを考えることが当然であろうから、南に阿弥陀堂が建てられたのではないだろうか。

それではそれ以後の本願寺はどうであったかについて、山科・石山・天満のうち唯一山科本願寺についてのみ兩堂の位置を知ることができる。

それは、明応八年（一四九九）三月二十五日に没する蓮如は、没する直前に兩堂に参拝している。その時の様子について見ると

一七日御影様へ御イトマコヒニ御参リアリ度トテ、御行水ヲメサレ、御イシヤウヲ御アラタメアリテ、御ノリモノニテ御堂ノ南ヨリ阿弥陀堂へ御参リアルトテ、花ノ本ニ御コシヲタテ、マツ花ヲナカメアリテ御ケンナリ、阿弥陀堂ヨリ御庭へ御下向アリテ面ヨリ御参アリ。^⑤（下略）

とある。これによると、明応八年三月七日、蓮如は親鸞の御影に対して暇乞いを行ない、また、阿弥陀堂にもお参りをした。その際「御堂（御影堂）ノ南ヨリ阿弥陀堂へ御参リ」していることがわかる。つまり、山科本願寺においては、北に御影堂が、南に阿弥陀堂があったことがわかる。

以上のことから、少なくとも本願寺においては、山科及び元和三年の火災以前の京都堀川での兩堂の位置は、北に

御影堂、南に阿弥陀堂が建っていたことがわかる。

二 両堂の成立

本願寺においては、山科及び京都堀川の元和火災以前についてのみ、北（向かって右）に御影堂が、南（向かって左）に阿弥陀堂があったことがわかったが、その他については両堂の位置は不明である。しかしながら本願寺においては、大谷以来この両堂の配置が本来的であったものと考えられる。

それでは次に東山大谷において廟堂が寺院化した時より両堂の成立期について見てみたい。

覚如は、廟堂に対して元亨元年（一三二一）すでに「本願寺」の寺号を名乗った。さらに影堂に阿弥陀如来を安置しようとして高田の専空や定専から拒否されて実現しなかった。しかしその後高田の順正の時阿弥陀如来を強引に安置したようである。

雖無指事候、如御先師常々可申承候に無其儀候之条、失本意候

一定専塲主の時、大谷の塲主御みゑひをかたはらへうつし申候て、本だうには阿みだを立申候べきと候しを、定専さいさん御申候によつて、うちをかれて候に、いま又かやうに御はからひ候間、せん師の御申のごとく歎申候へども、御もちひなく候、いかやうに候べきやらん、だんがう申たく存候、専空塲主も大谷のかゝる大事をば御申あはせ候けるとも承候間、その御いしゆをそむき候はじと令申候、諸事期後信候、恐々謹言

十一月廿日

順正（花押）

惣門徒之御中へ

申給へ^⑥

この順正の書状によると、以前（定専・専空の時）二度にわたり覚知は、影堂の親鸞御影を傍らへ遷し、阿弥陀如来を安置しようとした。しかし、この時覚如はどのように親鸞の御影を傍らへ遷そうとしたのかは明確ではない。そこで親鸞の御影がいかなる性格をもつものかについて、覚如の言動を中心にみてゆきたい。

まず覚如の前段階にある恵信尼からみてゆきたい。

恵信尼はその書状の中で次のように述べている。

（上略）さてひたちのしもつまと申候ところに、さかいのかうと申ところ候しとき、ゆめをみて候しやうは、たうくやうかとおほへて、ひんかしむきに御たうはたちて候に、しんかくとおほえて、御たうのまへには、たてあかししらく候に、たてあかしのにしに、御たうのまへに、とりゐにやうなるに、よこさまにわたりたるものに、ほとけをかけまいらせて候か、一たいは、たゝほとけの御かほにてはわたらせ給はて、たゝひかりのま中ほとけのつくわうのやうにて、まさしき御かたちはみへさせ給はす、たゝひかりはかりにてわたらせ給、いま一たいは、まさしき仏の御かほにてわたらせ給候しかは、これはなにほとけにてわたらせ給そと申候へは、申人はなに人とおほえす、あのひかりはかりにてわたらせ給は、あれこそほうねん（法然||筆者註、以下同じ）上人にわたらせ給へ、せいしほさつ（勢至菩薩）にてわたらせ給そかしと申せは、さて又いま一たいはと申せは、あれはくわんおん（観音）にてわたらせ給そかし、あれこそせんしん（善信）の御房よと申とおほえて、うちおとろきて候しこそ、ゆめにて候けりとは思て候しか、^⑦（下略）

この恵信尼の書状によると、恵信尼が関東滞在の折の夢の中で、東向きの堂の前で鳥居のようなものに掛けられた二体の仏に対して、一体は勢至菩薩であり法然を表わし、もう一体は観音菩薩であり親鸞を表わすとされている。この「東向きの堂」とは、西方極楽を主張する浄土系のお堂を意味すると思われる、阿弥陀如来を意識したものであると考えられる。さらにその前に掛けられた二体の仏とは、観音菩薩・勢至菩薩であり、要するに阿弥陀三尊を意識し



↑写真① 西本願寺所蔵鏡御影

→写真② 西本願寺所蔵安城御影(模本)

たものである。

次に覚如は、この恵信尼書状をうけてそのことを『口伝鈔』の「聖人本地観音の事」の条に述べており、その中には「源空聖人勢至菩薩の化現」とし、また「親鸞上人観世音菩薩の垂迹」と規定している。

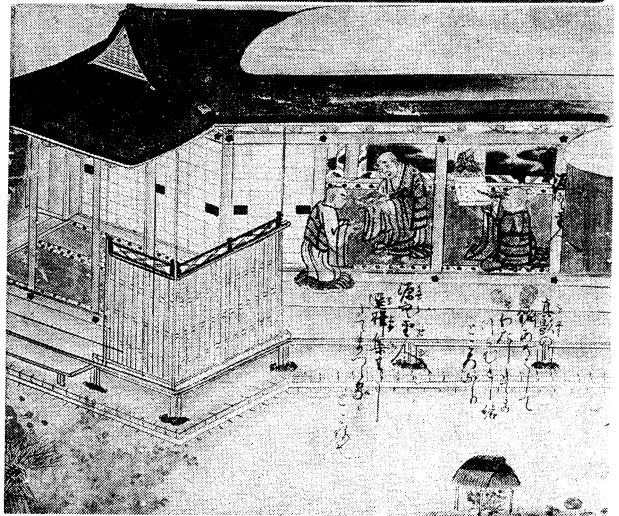
ここに恵信尼より覚如へ法然||勢至菩薩と親鸞||観音菩薩の思想は受け継がれたと考えて間違いないであろう。^⑨ それでは次に親鸞在世中より覚如にかけての絵像を見てゆくことにしたい。

まず親鸞在世中のものとされる親鸞の絵像として、現在西本願寺に所蔵されている「鏡御影」〈写真①〉と「安城御影」〈写真②〉がある。この二つの絵像を見ると、鏡御影は立像であるのに対して安城御影は座像でありその



→〈写真③〉妙源寺所蔵法然絵像

〈写真④〉専修寺所蔵親鸞伝絵↓



形態を異にするが、ともに親鸞自身は右向きの姿勢で描かれている。つまり、親鸞絵像は、親鸞の右側に何らかの存在を意識したものであるといえよう。

これに対して法然の絵像をみると、親鸞が法然の門にはいり、元久二年（一二〇五）四月十四日に法然より『選択集』を伝授され、同年閏七月二十九日には、先の四月十四日に親鸞自身で描いた法然の絵像に賛銘を書いてもらう。この時法然に賛銘を書いてもらった法然の絵像がどのようなものであったのかについて、現在岡崎市の妙源寺に残

る選択相伝の御影と呼ばれる法然絵像〈写真③〉は、左向きの絵像である。この法然絵像について小山正文氏は、「元久二年の選択相伝御影に相当するというのが、（中略）寺伝の蓋然性はきわめて高い」とされる。^④さらに、覚如が製作した高田専修寺に残る『親鸞聖人伝絵』の「選択相伝段」を見てみると、法然が賛銘を書いている絵像は、法然自身が左向きの姿勢で描かれており〈写真④〉、少なくとも覚如は、親鸞自身が描いたとされる法然絵像は左向きの像であると考えていたといえるであろう。つまり、法然絵像は、親鸞の絵像とは逆の形態をとり、法然自身は左向きに描かれており、法然の左側に何かの存在を意識したものであるといえよう。

以上のような「右向きの親鸞像」と「左向きの法然像」は、親鸞＝観音菩薩と法然＝勢至菩薩を考えあわせると、阿弥陀如来を中心とした阿弥陀三尊を意味したものであるといえるであろう。つまり、覚如は、恵信尼の書状の夢の内容をうけて、親鸞を観音菩薩、法然を勢至菩薩という位置づけを継承していたことは確かである。このことから、阿弥陀三尊の場合、中尊阿弥陀如来の脇侍として、観音菩薩は阿弥陀如来の左手（向かって右側）に、勢至菩薩は阿



〈写真⑤〉善導・法然・親鸞連座像

弥陀如来の右手（向かって左側）に位置する。この阿弥陀三尊の配置のなかの観音・勢至を親鸞・法然に当てはめると、親鸞は左に、法然は右に位置することとなる。

なお、ここで少し西本願寺に残る「善導・法然・親鸞三祖連座像」〈写真⑤〉について考えておきたい。

この三祖連座像は、右向きの善導・

左向きの法然・右向きの親鸞の立像を上から順に描いたものであり、宮崎圓遵氏によると、「およそ南北朝ごろの作と考えられるが、三人の肖像の側に記している『光明寺善導和尚』『黒谷源空聖人』『本願寺親鸞聖人』という三札銘は、覚如（宗昭）の筆であろう」と、この三祖連座像の製作に覚如が関与したことを指摘している。宮崎氏は、さらに同書の中で、「智栄の『善導別徳』の文に『善導阿弥陀如来化身』との指摘をしており、この善導・法然・親鸞の三祖連座像も阿弥陀三尊を意識したものとも見ることができなくもなく、この連座像製作に対して覚如が関与していることは興味深いものがある。

さらに『存覚袖日記』に見られる^⑬

方便法身尊像并両聖人真影

応安三^辛三月廿八日

画工法橋□□

自釈妙覚相伝之

大和国山辺郡向淵住顕実

について、宮崎氏は、「おそらく方便法身の尊形を中心にして、その下部の左右に両聖人を描いたものであろう」とし、奈良県向淵正定寺に残る上部剝落の激しいが、礼盤に座する親鸞・法然両聖人の存在を紹介しており、この絵像も阿弥陀三尊を意識したものと考えられるのではないだろうか。

以上見てきたごとく、覚如の頃には親鸞∥観音菩薩、法然∥勢至菩薩というみかたが大きな位置をしめていたと考えられ、覚如自身もこのことを意識していたのは間違いないであろう。この覚如の親鸞に対するとらえかたは、本願寺を影堂から寺院化したようにとした時に大きな影響を与えてと考えられるであろう。つまり、覚如が影堂の親鸞像を傍らに遷し、阿弥陀如来を安置しようとした時、あるいは善如が影堂に阿弥陀如来を安置し親鸞御影を傍らに遷した時

に、親鸞を観音菩薩と見なして阿弥陀如来の左側に遷したと考えるのが自然なことであろう。

さらにその後存如が両堂を整備したときには、善如が遷した親鸞像の位置を踏襲して、阿弥陀堂を南（向かって左側）に、御影堂を北（向かって右側）に建立したものであらうと考えられる。

このように本願寺では本来大谷以来阿弥陀堂が南に、御影堂が北にある配置となっていたものであらう。

三 両堂入れ替えの要因

以上のように大谷以来本願寺では南に阿弥陀堂、北に御影堂が配置されていたと考えられることを指摘した。しかし、西本願寺では、元和三年の火災に再建された両堂は北に阿弥陀堂が、南に御影堂が建てられることとなった。

それではここで、えの時の再建の状況を簡単に追ってみることにしたい。

元和三年十二月二十日に焼失した両堂は、翌四年十一月十七日に仮阿弥陀堂の移徙が行われ、同六年二月二十二日には親鸞影像が仮阿弥陀堂に遷されている。寛永十三年（一六三六）八月十九日に漸く御影堂が完成し親鸞影像が遷された。さらに遅れて現在の阿弥陀堂が落成されたのは宝暦十年（一七六〇）三月二十六日のことである。

これを見ていると当初から北に阿弥陀堂が再建される計画であったと見られる。しかし、仮阿弥陀堂が完成した時に親鸞影像を仮阿弥陀堂に遷したことは、これを御影堂とすることも可能であったとも考えられ、今後両堂の再建事情について詳細に検証してゆくこととしたい。

そこで両堂の入れ替えについて別の角度から考えておきたい。

江戸時代前期、西本願寺ではそれまで継承してきたことをかなり変更している。

まず寛永五年（一六二八）六月、西本願寺ではそれまで使用されていた「鶴丸」の家紋を「八藤」に改めた。^⑤



〈写真⑥〉西本願寺所蔵徳力善雪筆親鸞絵伝

一本願寺御家の御紋、根本ハ鶴丸也。日野家の紋也。御当一家一門御一家之衆ハ二鶴也。証如上人ヨリ初テ撰家ノ猶子ト成給テヨリ、御家の紋ハツ藤ニ改マリ候。証如上人大坂御座候時、九条殿前関白尚経公猶子ト成タマヒ候当家撰家為子タマフ事は始也。雖然家の紋ナト被改候事、顯如御一代無之。准如上人之御代、八藤又ハ房ニ御改ナサレ、幕其外御道具之紋共御書替被成候。寛永五年迄ハ御堂ニ御掛リ候顯如上人御影式襲御影モ常之御影モ御袈裟ノ御紋鶴丸ニテ

御座候キ

寛永五年六月初比、八藤ニ御書ナラシ被成候、御影ハソノマ

テ替候ニ（下略）

また、寛文三年（一六六三）親鸞四百回忌にあたり徳力善雪によつて描かれた『親鸞聖人絵伝』の「大谷廟堂段」では、親鸞影像の前卓には「鶴亀」の燭台が描かれている〈写真⑥〉が、その後西本願寺ではこの「鶴亀」の燭台を止め現在使用されている形の「蠟燭立」を使用することになる。

そして、「一和讃ノユリ」というように、江戸時代初期まで続けられていた「揺り念仏」を停止した。

さらに、蓮如以来「御文（おふみ）」と呼ばれていたものを、貞享元年（一六八四）の寂如の開版以来、その奥書に

此五帖一部之文章者、信証院蓮如対愚昧衆生所令和述之消息而、祖師相伝之一途也、庶幾一流道俗薰誦之聴聞之決定正義被得信心、速可遂報土往生之素懷者也

貞享元年九月廿五日

寂如（花押）書（傍点筆者）

とされ、この時以来「御文章」と言い改められた。

最後に、末寺に下付される「親鸞絵伝」のなかの「荼毘」の時の炎の向きが、江戸時代初期までは向かって右に流れているように描かれていたが、西本願寺では炎が向かって左に流れているように描かれるように改められた。

このような西本願寺の変革の一連の動きのなかに両堂の入れ替えがなされたとも考えられるのではないであろうか。

おわりに

以上本願寺の両堂の配置について見た場合、本願寺では伝統的に北に御影堂、南に阿弥陀堂があったことがわかる。そして、その両堂の位置が、親鸞在世当時より描かれた親鸞の絵像や、恵信尼にはじまり覚如に継承された親鸞のとらえられ方に起因することを指摘した。ところが、元和の火災によって焼失したのち再建された現在の両堂の配置は北に阿弥陀堂、南に御影堂である。「本山」にとって伽藍配置が以前と大きく異なるということは非常に重要な問題であるにもかかわらず、あえて両堂を入れ換えた再建に踏み切った所以は何であったのか。今後、両堂の再建について厳密に史料を検討してゆきたい。

註

- ① 「法流故実条々秘録一」第六一条（『真宗史料集成』第九卷、教団の制度化、一九七六年、所収）。
- ② この元和火災前後の本願寺両堂の状況については、拙稿「洛中洛外図に見る本願寺」（『国史学研究』第十七号、一九九一年）を参照されたい。
- ③ 本願寺史料研究所編『本願寺史一』二九三頁（一九六一年）参照。

④ 堅田修氏「解説 蓮如の生涯」(『真宗史料集成』第二卷、蓮如とその教団、一九七七年、所収)。

⑤ 「第八祖御物語空善聞書」第一四一条(前掲註④同書所収)。

⑥ 専修寺文書一三号(本願寺史料研究所編『本願寺史一』一八六頁、一九六一年、所収)。

⑦ 「恵信尼文書」第三通(真宗聖典編算委員会編『浄土真宗聖典』、一九八五年、所収)。

⑧ 『口伝鈔』第一二段(前掲註⑦同書所収)。

⑨ なお、法然の童名は「勢至丸」とされており、ここからも法然は「勢至菩薩」の考えをうかがうことができるであろう。

⑩ 小山正文氏「妙源寺藏法然上人絵像解説」(『真宗重宝聚英』第六卷、一九八八年、所収)。

⑪ 宮崎圓遵氏「本願寺所藏善導源空親鸞三祖像について」(宮崎圓遵著作集『真宗史の研究(上)』、一九八七年、所収)。

⑫ ただ、善導が正面向に描かれず、右向きの描かれていることより、この連座像を直ちに阿弥陀三尊と置き換えることには注意が必要であろう。

⑬ 龍谷大学善本叢書3『存覚一期記・存覚袖日記』(一九七二年、所収)。

⑭ 宮崎圓遵氏「初期真宗の連座像について」(前掲註⑪同書所収)。

⑮ 「法流故実条々秘録二」第五条(前掲註①同書所収)。

⑯ 「元和七年興正寺願尊室祐心尼七周忌」(本願寺史料集

本願寺の伽藍配置について

成『西光寺古記』、一九八八年、所収)など、しばしば見られる。

⑰ この揺り念仏の停止時期についてはもう少し具体的な時期を検討するつもりである。

⑱ 和泉佐野市貝戸家所蔵「御文章」。なお、真宗聖典編算委員会編『浄土真宗聖典』(一九八五年)「御文章解説」においてもこのことが指摘されている。

〔付記〕

大会発表において早島有毅氏より、小山正文氏の提唱を踏まえて、両堂の成立を善如期とすべき御指摘を頂いたが、小山氏が両堂の成立期を善如期とする根拠である「源誓上人絵伝」(『真宗重宝聚英』第十卷)の絵相を一見すると本願寺の両堂のように見えるが、これを直ちに本願寺の両堂とすることは疑問がある。一つは「廟堂」とされる建物六角であることである。親鸞の廟堂は建武年間の足利尊氏の戦乱により焼失し、その後、関東の門弟によって既存のお堂が買い取られ移建されたとなっている。この既存のお堂が六角堂であったと考えることは少し無理があろう。さらにもう一つの点は、「廟堂」とされる建物を小山氏が阿弥陀堂と考えるお堂は並んでいるように見うけられるが、その間には堀があり仕切られており、これを両堂とする 것도少々無理があると考えられるわけである。つまりこの点から筆者は取り敢えず現在のところ両堂の成立時期を『本願寺史』の言う存如期としておきたい。